

心臓超音波テキスト 第2版

日本超音波検査学会監修
増田喜一・遠田栄一編著



私がプローブを握り始めて20年になるが、その間で心エコー図検査は飛躍的な進歩を遂げた。心機能評価は収縮能のみならず拡張能評価も導入され、ドプラ法での逆流評価では、従来の定性的・半定量的評価から定量的評価が主流となってきている。また、心エコー機器の進歩により、画質向上は目覚ましく、弁の性状・形態の詳細がわかるようになり、さらに、スペクトルトラッキングや3次元エコーも臨床に活用されつつある。以前とは比べものにならない情報は、臨床にとって非常に重要なものとなり、その重要性に伴って心エコー検査技師のスキルアップが求められてきている。診断学としては、著名な先生方が執筆された参考書や講習会で習得ができる。しかし、そのベースとなる“きちんとした画像描出”や“検査を進めていく考え方”など、実践を身につける著書や講習会は少ないように思う。

本書は、その“きちんとした画像描出”や“検査を進めていく考え方”をていねいにわかりやすく記載し、超音波検査の最大の欠点と思われる検者に依存する経験や技量を補ってくれる参考書である。基本的な走査法や計測法はもちろんであるが、検査のコツや検査を行ううえで知っておくべきことを「ワンポイントアドバイス」として多数盛り込んでいる。小さな枠で囲まれている数行の文字や図であるが、実用的な内容を実にわかりやすく記載している。

また、「ひとくちメモ」も知識として身につけておくと、正しい検査結果や検査方向の広がりにつながる内容である。さらに、これら「ワンポイントアドバイス」「ひとくちメモ」のインデックスを冒頭

におき、読者が調べやすくした点などは心エコー図検査に携わる者に対する優しささえも感じられる。

本書は第2版であり、第1版と比較しさまざまな部分でバージョンアップされているが、大きな相違点としては、「自覚症状・臨床所見」「人工弁」「特殊検査」に関する内容がそれぞれ一項目としてあげられていることである。これらは近年、とくに検者に求められていることである。「自覚症状・臨床所見」を把握することで医師の依頼目的がわかり、さらにみるべきポイントも知りうる。その内容を実にコンパクトにまとめている。「人工弁」では、各弁の特徴を知ったうえで人工弁機能不全を予測しうるパラメータが記載されている。「特殊検査」においては、経食道心エコー・負荷心エコー・コントラストエコー・冠動脈血流検査・dyssynchrony 評価・3次元エコーに関して知るべきことや、検査の進め方などが具体的に記載されている。

心エコー図検査における近年の著しい進展により、検査技師が従来の枠をこえて臨床に携わっていく方向にある。本書はそんな心エコー図検査に携わる方々に、ぜひ携帯していただきたい一冊である。(社会保険小倉記念病院 検査技師部 梅田ひろみ) <B5判/330頁/定価7,980円(本体7,600円+税5%)/医歯薬出版/2009>